
グレートランド・マカロニ奇譚

野井 之一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレートランド・マカロニ奇譚

【Zコード】

Z9042Y

【作者名】

野井 之一

【あらすじ】

アスカはグレートランドのやうに腕の立つシェリフ（保安官）だ。

彼女はある日、最年少シェリフのチャールズを上司から押し付けられ、彼と共に仕事をすることになつたが、彼はなんとも扱いにくく屁理屈少年だつた。

なかなかうまくいかない二人の前に巷で話題のラッキーストライク強盗団のリーダー、フィンが現れ、アスカの周りはめまぐるしく変化していく。

荒野のシルバースター？

広大な面積を誇る、とある大国の『開拓時代』と呼ばれた夢と自由、金と銃が溢れた時代。

これは、そんな時代の歴史の教科書にも載らないような、閑古鳥が鳴く歴史資料館の、古びた資料のはじつこの、たった数行の記述の行間に詰まつた物語である。

*

始まりは冷たい風の吹く、暗い日だった。昨日までは風のない温かな陽気だったにも関わらず、今日は風が乾いた土を巻き上げ、視界はほとんど黄褐色に包まれていた。

アスカ・スワイートフィッシュはそんな荒野で砂に怯んでいる情けない愛馬の手綱を引っ張つて歩いている。砂嵐から彼女を守るはずのマントはバタバタと音を立てながら煽られ、ほとんど意味をなしておらず、胸元に輝く銀の星が見え隠れしていた。

彼女は砂埃に目をやられ、目に涙を浮かべながらも、よつやく家屋が立ち並ぶ場所までやつてくると、馬を馬屋に繋いで建物の中に入つていった。

中には少し太った中年男性 マードックが座つており、彼はアスカを見るなり笑つて見せた。アスカも柔らかく笑んで見せると、マードックの横にあつた椅子に座り、上着と帽子、重々しいピストルが収められたガンベルトをテーブルに置いた。

「お疲れ」

マードックはマグカップにぬるい水を注いでアスカに渡した。彼女はそれを受け取ると一口飲んで、ふうと一息ついた。

それから水をかぶつた犬のよう^にに頭をブルブルと横に振ると、彼女の黒くて長い跳ねつ毛から大量の砂が音を立てて床へと落ちていった。マードックはそれに嫌そ^うな表情を浮かべることなく、また、アスカも特に特別な反応を見せるこ^{とも}なく、たわいない会話をしていた。

会話に区切りがつくと、アスカは立ち上がり^て簞を取つて、その砂をそのまま外へと掃き出し、再び椅子に納まつた。

「そ^ういや、連續牛泥棒を捕まえたんだつて？」

マードックは興味津々にアスカに尋ねると、彼女は少し照れくさそうに笑つて頭を搔く。ふるい落としきれなかつた砂が、また音を立てて床に飛散した。

「ええ、マードックさん。なんとか捕まえるこ^とができましたよ」

アスカはまた簞で砂を外へと掃き出しながら言つた。

「お手柄じゃないか！ 君はシェリフの鏡その物だ！ 私もあと十年若けりや、そ^こらのアウトローにギャフンと言わせてやるんだがなあ！」

マードックは大きく口を開けて豪快に笑い、アスカはそれに「大げさですよ」と控えめに答えた。

彼等はシェリフだつた。

広大な大陸全てを國土とする、巨大な国　『グレートランド』をいくつかに分割した『州』、またはそれをさらに分割した『町』、『村』と呼ばれる区画間を渡り歩いたり駐在したりして、殺しや強盗などの犯罪行為を行つ『アウトロー』から善良な州民を守るのが彼等の仕事だつた。

一見、アスカにはそんな仕事が勤まるようには見えないが、彼女は父が伝説的なシェリフだったこともあって、そこらの男よりは銃の扱いを知っているし、ケンカができないような、しおらしい娘というわけでもなかつた。

「さて」

急にマードックが眞面目な表情になつた。

「お前も一人前になつたことだし、そろそろ部下の一人や二人、必要だと思っているのだが……」

マードックはそう言つと、トントンと指で机を叩きながら言つた。アスカは彼の突然の話にキョトンとした表情を浮かべた。

「部下……ですか？」

アスカは自分の聞き間違えではないかと思い尋ね返すと、マードックは深く頷いた。

「ああ、そうだ。ほら、聞いたことはないか？ 最年少でシェリフになつた少年さ。」の間の新聞に載つていた……

最年少でシェリフになつた少年 アスカは数日前に新聞で読んだ記事の内容が頭を過ぎつた。

なんでも、神童と呼ばれるほどの頭のいい少年で、しかも州の有力者の推薦もあって、十五歳でシェリフになつた そんな感じの内容だつたはずだ。

「その人が私の弟子に？」

「ああ、そうだ。他の者には子守りは職務外だと断られてしまつてね。かといって、ほら……『アイツ等』に任せらるつていいのはありえないだろ?」

マードックが少し不快そうな表情を浮かべて言つた『アイツ等』
といつのはシェリフといつ立場を利用して、アウトローに手を貸し
たりするよつような素行の悪いシェリフのことだつた。

シェリフは拳銃の実力と少しでも権力のある人物からの推薦さえ
あれば就業できるために悪人がシェリフになつてしまつことは珍し
くないうえに、その数は少なくなかつた。

また、彼らのよつな存在が、州民のシェリフに対する感情を日々
悪くしている原因でもあるゆえにマードックのよつな真面目で誠実
なシェリフは彼らと常に睨み合つていた。

ともかく、アスカは少し悩んだ。

マードックの頼みを断つたシェリフたちの意見にアスカ自身も賛同
するし、シェリフの仕事はアウトローを捕まえることで、安全な仕
事であるとは言えない職業だ。今日の馬泥棒を捕まえるときも銃撃
戦があつたのに、そんな場所に子供を連れて行つて使えるとも思え
ないし、なにより危険だ。

アスカはどうにかして断れないものかと考え込んでいた。

「あの、その少年には事務所の仕事をやつてもうひとつといつのはどうでしょ? 頭のいい少年であれば処理も早い、きっと適任でしょ?」

アスカの提案に、マードックは首を横に振つた。

「その少年は物好きなことに『現場』を『所望』でね」

シェリフといつのは実力と推薦があればなれるが、初めは地元の

シェリフ事務所の雑用から始まり、ある程度の荒事を経験した後に事務と駐在専門のシェリフか巡回専門のシェリフになる。アスカのように巡回シェリフになれば実力のあるシェリフの助手になつて色々と経験させられる。

それが終われば自分の意志で仕事をすることが許される。一人、もしくは仲間と狭い範囲を移動する。村から村、町から町。実績をあげるほど任される範囲は広がり、最終的には州間を移動する仕事を任される。希望すれば本部の仕事に移ることさえ可能だ。

この仕事は実力主義だ。だから入ってきたばかりの、しかもまだ実績の一つさえあげたことがない子供がいきなり重要なプロセスを抜かして『現場』の職務につくことはない。アスカだって、ほかのまつとうなシェリフだって、最初は雑用から そうして『今』があるのだ。

「マードックさん、その少年を優遇しすぎなのでは？」

「うーむ……実を言つと、『例の少年』の親御さんは……その、あれだ……私たちに色々便宜をはかつてくださつている方の『ご子息なんだ。だから、その……』

ああなるほど。

アスカは納得した。納得はしたが、子供の面倒はごめんだ。だが、『アイツ等』にまだ純粋な子供を預けるくらいなら、アスカは定年間近の彼の頼みをきくことにした。

それに、きっと、その少年はヒーローになりたいだけなのだろう。一度くらい銃撃戦を経験すれば、泣いて両親のところに戻るに違いない。そう思つたからこそ、引き受けようと思つた。

「分かりました。その少年は私が預かります」

アスカは嫌そうな表情をできるだけ表に出さないようにしながら、

席を立つてガンベルトに銃を入れると、
くさと外へ出て行つてしまつた。

帽子と上着を持つて、そそ

2011.11.27

荒野のシルバースター？

外は相変わらず酷い砂嵐で、アスカは下を向いて砂から目を守り、別の建物に入つて行つた。

今度、アスカが入つたのは酒場だった。この砂嵐のせいで商売になつていないとと思ったが、中は賑やかで、酔払い同士が大声で自慢話をしていたり、カードゲームをしてしたり、音楽に合わせて踊る男女がいる。

アスカはそれらを微笑ましく思いながらカウンターのほうまでやつてくると、椅子に座つた。

すぐに髪をたくわえたバー・テンダーが彼女の目の前までやつてくると、アスカは『緑茶レモネード』を注文した。バー・テンダーは少し嫌そうな表情を浮かべはしたが、すぐにそれを持つてくると、アスカの目の前にドンと乱暴に置いた。

「ちょっとオ、酒場に来て、ジュースなんて頼むなんて、どうかしてるんじゃない？」

横にフリルたっぷりの派手な赤いドレスを着た女性が座つてくると、アスカはバー・テンダーを手招きして、彼女にお酒を持つて来るようになつた。

彼女はキヤサリン。いつも派手なドレスを着て、化粧もばつちりしていて、とても派手な人物だ。アスカと似たルートで町から町へ、村から村へと渡り歩いているらしく、何度も顔を合わせていた。

「こんばんは、キヤサリンさん」

アスカが挨拶すると、キヤサリンは少し嫌そうな表情を浮かべて、

バー・テンダーが持つて来た酒に礼の一つも言わずに口をつけた。しばらく二人は黙つていたが、そのうちキヤサリンはアスカに向き直つた。

「アンタがここに来たつてことは、何か情報欲しいつてことオ？」
「私にだつて仕事を抜きで楽しみたい時もありますよ」

疑り深い目でアスカを見ながらキヤサリンが尋ねてきたので、アスカは苦笑し、グラスを傾けながら言つと、キヤサリンは「あつそ」と冷たくあしらつた。その後、キヤサリンは急に顔を赤らめさせで、そわそわとしだした。

「あのさア、アンタ、ラッキーストライク強盗団の最近の動向について何か知らない？」

ラッキーストライク強盗団。

アスカは記憶を辿つてはみたが、その名前に心当たりはなかつた。そもそも、強盗団なんてものは小から大まで、情報が集約される本部でさえ数が把握しきれないほどあるのだ。

「さあ、新手の強盗団ですか？いきなり言われましても……強盗団は星の数ほどありますからね」

「ラッキーストライク強盗団を知らないの！？ つていうか、彼らを他の強盗団と一緒にしないでくれる！？」

キヤサリンは呆れているといつよりは、顔を真っ赤にさせて怒つてみせた。アスカはなぜ彼女が怒つているのかわからなかつたが、彼女を怒らせるほど有名らしい強盗団にはシェリフとして興味があつた。

「キヤサリンさん、その強盗団についてお話を聞かせてもらつてい
ですか？」

「いいわよ、でもそうね、ビーフシチューともつ一杯お酒を奢
つてくれるなら教えてあげなくもないわ！」

ショリフの給料は高くはないのだが、アスカは彼女の要望どおり
バーテンダーにそれらを注文すると、キヤサリンは『つまらない奴
と啖きながらカウンターにひじを突いた。

「まあ、約束だから教えてあげるわ。ラツキー・ストライク強盗団は
ねエ、隣の州で暴れに暴れまわった強盗団なの。銀行強盗で失敗知
らずでエ、昨日も銀行強盗してエ……あ、でもその後で列車強盗も
したのよ…」

「やつかいですね。その、リーダーのこととか分かります？」

「知ってるわよ、フィンのことね……なアによ、彼を捕まえる
氣イ？」

「フィン。

それがリーダーの名前なのだろう。本名なのか偽名なのかは分か
らないが、重要な手がかりなのはたしかだつた。

アスカはメモ帳とペンを手に、キヤサリンが喋っている内容の要
点部分だけ書き出していた。キヤサリンには手帳に何が書かれてい
るかは分からぬ様子だったが、アスカが書いている内容の予想は
できているらしかつた。

「いえ、こちらの州に入つてきましたが、入つてこないの
であれば私に捕まえる権限はありませんから……」

「ふうん……まあ、アンタみたいなへなちょこショリフじゃあ、到
底捕まえられないような人だけオ……まあ、いいわ。そオね、一
言で言い表すなら、イイ男よ」

キヤサリンはつとつとした表情で言つた。アスカはリーダーの特徴を聞き取つて身構えていたのに、彼女の口からは抽象的な表現が飛び出してきたので、「は?」と怪訝そうに眉をひそめた。彼女はそれを不快に思つたのか、「オシャレなの!」と怒鳴つた。

「できればもつと具体的な特徴を教えてくれると……」

「ンもう! アンタつてほんと、想像力つてもんが無いのね! 強盗ですつていう雰囲気はないの! あと、田舎者つて感じじやなくてエ……」

再び彼女の口から抽象的な表現に、アスカは少し苛立ちを覚えながらペンを走らせていった。

「髪と目の色は?」

「力強そうな茶髪ねエ、目は海みたいに深い青でキレイなのつ!」

「力強い茶髪? 海を見たことが……?」

「アンタつてホント、バカね! アンタが具体的について言つからこつちは親切心で教えてやつてんのよ! ?まあいいわ。あとはねえ、おつきな銃を持つてるの! すごいのよ! すつぐく遠くにあるリンクゴを撃ち抜くのよ!」

キヤサリンが指を折つて手を銃に見たてると、アスカの胸を「バン!」と撃ち抜いた。

アスカはそれをぼんやりと見ながら頭の中で、できればこの強盗には来て欲しくないと思っていた。アスカは銃撃戦に自信がないわけではなかつたが、遠くにあるリンクゴを撃ち抜くような相手に勝てる自信は全くと言つていいほどなかつたのだ。

「隣の州で暴れに暴れまくつたからア、今は逃走中なのよ。もしか

したらコツチに来るかもって噂があつてねエ……。ねエ、もし来つて分かつたら、すぐにアタシに教えてよ」

ようやくジークシチューが到着すると、キャサリンは舌なめずりをしながら手のひらをすり合わせ、彼女の見た目からは想像できないほど豪快にスプーンでシチューを食べはじめた。

アスカはそんな彼女をしばらく眺めながら、そろそろ宿をとつて寝ようと代金をカウンターに置いて酒場から出て行つた。

冷たい夜風が頬を撫でる。

明日になつたらそのラッキーストライク強盗団とやらの情報を閲覧しに保安官事務所に行こう。アスカはランプの灯る宿に入ると、一部屋とり、案内された部屋に入るなり鍵を閉め、ガンベルトをベッドサイドに置くと、硬いベッドに倒れこんだ。

とても疲れていたらしい。アスカはあつという間に眠りについた。

2011.11.27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042y/>

グレートランド・マカロニ奇譚

2011年11月27日19時56分発行